

虐 魄

「樂藝 第30号」記念増刊号

序文

ここに、文芸部機関誌「虐睨」の第一号をお送りする。

純文学寄りの作品から、SF テイストのもの、はてはシュルレアリスムまで、幅広いジャンルの作品のアンソロジーとなっているので、先入観なくお楽しみいただきたい。

以下、収録作品を挙げておこう。

短篇饗宴 一

1 「満タンになって、また零した」 円亮

2 「GE」 三角想樹

3 「ドーナツの穴」 鵜川龍史

又りレー小説～「見えるんだよ」

1 「可愛いおとふと」 円亮

2 「体育競技会の出来事」 三角想樹

3 「うさぎの墓」 鵜川龍史

※ 〈又りレー小説〉について

複数メンバーでの競作の代表と言えば〈りレー小説〉であるが、その弱点は、参加者が同時に執筆することができず、開始から終了まで時間がかかることである。

その弱点克服のために編み出したのが、冒頭部分を共有しながら、それに後続する部分を創作する〈又りレー小説〉である。三又、四又と人数に応じて枝分れすることから名付けた。

今回のお題は、夏を意識して「見えるんだよ」。

何が見えるのか、あるいは何が見えないのか。見てはならないのか、見なくてはならないのか。実体があるのか、幻想なのか。執筆者ごとのキャラクターがはっきり出た作品が集まったので、それぞれのアプローチの違いを含めてお楽しみいただきたい。

短篇饗宴 二

1 「小説墮落」 荻孝太郎

2 【連作小品二篇】「夏の抜け殻」 鵜川龍史

ファイルの設定上、ここから直接、各ページに飛ぶことはできないが、閲覧しているアプリケーションによっては、目次から飛べると思います。

どうぞ、中高一貫の男子校生の本気をお楽しみください。

文芸部顧問 鵜川龍史

「開けろ」

ドンドンドンドン。ドアを叩く音にリズムがある。煙草にライターを寄せる、が、火がつかないので寝る。しかし、寝るにはこの音は少しうるさい。

「開けろ。ぶっ壊すぞ」

一目見ただけでぶっ壊せるものではないのわかるだろうに。私は布団に潜り込んで目を閉じた。

「お父さん」

かお——。

「お父さん、開けて。今日学校に鍵忘れちゃった」

アルミのドアを通して娘のくぐもった声が確かに聞こえる。同時に控えめにドアを叩く音も聞こえた。私は布団をはねのけて、ドアに向かって突進した。震える手を押さえて、恐る恐るドアを開いた。青いワイシャツ姿のサングラス男。

「いつまで待たせんだ」

娘の声の余韻が残った耳孔の中にどすの利いた声が響く。頬に二発、腹に一発食らって、玄関の板敷きに頭を打ちつけた。その上を跨いで、男は土足で部屋の奥へと入っていく。私は痛みと吐き気で朦朧とした気分の中で棚が倒れたる音や皿が割れる音を聞いた。

男はひとしきり暴れた後、私の腕時計を持って出ていった。帰り際に胸ぐらを掴み、

「一ヶ月だ。一ヶ月以内に一五〇集めろ」

と言った。その後は憶えていない。

——その自動販売機が公園に設置されたのは五年前だった。私は仕事帰りに、部活から帰ってきた薫子と駅で合流して、そこでアイステイーを買ってやるのが日課だった。二人ともその飲み物を特別気に入っていたわけではない。ボタンを押すと缶やペットボトルが落ちてくる通常のもではなく、紙コップが出て飲み物が注がれるという屋外では珍しいタイプの自販機だったからだ。そこで彼女は毎回同じアイステイーを買った。クリーム少なめ、砂糖多めのアイステイーだ。

紙コップの中に液体がゆっくりと注がれるのを、彼女はじっと見つめていた。私は高校生らしからぬその姿を見るのが好きだった。

私は仕事の帰りに徐々に例の自販機に寄って、アイステイーを買った。ボタンを押すと、中でモーターが動きだし、ベルトが回転するような音が聞こえる。そして得体の知れない大袈裟な音がしたかと思ったら、スコンという乾いた小さな音がして、取り出し口に紙コップが落ちる。私は薫子がしていたようにしゃがみ込んで、設置された紙コップをじっと見つめた。しばらくすると、上部から液体が弱々しく流れ出てきて白い容器の中に注ぎ込まれていく。注ぎ終わった合図の音が聞こえてコップを取り出すと、長い間忘れていた重みが確かにそこにあって、こぼさないように注意しながらそれを薫子に渡した。

「ありがとう」

薫子はそれを受け取ってにっこりと笑顔を返す。私はコーヒーをクリーム多めで買い、二人で近くのベンチに座った。

「冷たすぎやしないか？」

「ううん。大丈夫。私、頭がキーンとするのが好きだから」

そう言った直後に、彼女は「ひゃーっ」と言って頭を抱えた。私はつい笑みを漏らした。

「慌てるなよ」

薫子は啜る音を立てて飲み物を飲む。そうやって飲むのが好きらしい。別に行儀が悪いわけではない。私は好きだ。

横で彼女が飲み物を啜る音を聞きながら、もしかしたら人間は世界の大半を、視覚ではなく聴覚で認識しているのではないかと考えた。自動販売機のボタンを押したのを、中の機械が動く音で確認して、紙コップの中身が満タンになっていくのを液体が注がれる音で理解した。もちろんそれは、視覚の及ばないところには聴覚を使わざるをえないから、というだけの話だが、私と薫子の世界では必要とされるのは音だけだ。だから、私は彼女が飲み物を啜る音で彼女を――。

「よ」

顔を上げると、サングラスの男が立っていた。今日はスーツを着ている。

「どうだ。金は集まったか。後、十日だぜ」

私は無言で男を睨みつけた。薫子が不安そうな顔で横から私を覗き込んでいる。大丈夫だよ。お前には指一本触れさせない。

「ま、いいさ。後十日だしな。それまでに一五〇万持ってこれなかったらわかるよな？」

男は指鉄砲を私のこめかみにあてて、耳元でバンと囁いた。

「お、なんだこりゃ。紅茶か？」

私はとっさに身構えた。

「まさか俺のために用意しておいてくれたのか？ 気が利くな。あいにく俺は紅茶は嫌いなもんでな。じゃあな」

男は鼻歌を歌いながら帰っていった。私はポケットに財布がないのに気づいた。横にはアイスティーがなみなみと注がれた紙コップが口をつけられていないまま置かれていた。私は音を立ててそれを啜った。同時に涙も出た。

「お父さん、散歩に行こうよ」

金曜日の夕方、薫子が疲れて寝込んでいた私を揺すり起こした。少し頭痛がしたがなんとか起き上がって外に出た。

「夏なのに寒いね」

「ああ、寒い」

私はポロシャツ一枚で外出したことを後悔した。そして、薫子の私服を久しぶりに見たことに気がついた。彼女は薄ピンクのシャツにフリルのついたスカートを履いていた。

「学校行かない？」

薫子は私の前に身を乗り出してきて言った。

「学校？」

「うん、私の高校。今は夏休みだから、校舎は開いてるけど人は少ないから簡単に入れるよ」

「そうか、じゃあ行ってみるか」

薫子は喜色満面で私の腕を引っ張った。

靴箱に二人分の靴を放り込み、私は薫子の後ろを忍び足でついていった。磨き上げられた床を滑りそうになりながら走る靴下の感触がなつかしい。私が昔いた場所を娘が受け継いでいるのは不思議な気分だ。

薫子の教室は二階の一番奥にあった。中に入ると、制汗剤やワックスなどが混じった匂いが鼻孔を満たす。私の知らない彼女がここにいるのだ。

「お父さん教師やって」

窓際の席についた彼女が足を鳴らしてせがむ。私は教壇に立って、神妙な顔を作り濁声を出す。

「えー、薫子君、四十五ページの六行目を読んで。ほら、起立」

薫子は腹を抱えて「全然似てない」と言った。

「誰に？」

薫子は私の質問を無視して、しばらく間を置いてから言った。

「お父さん、今日学校に来てもらったのは理由があります」

「何だ？」

「ヒントはお父さんが初めて泣いた日の日付と同じ番号のロッカーです」

初めて泣いた日？ 私は子供の頃の泣いた記憶を思い返したが、正確な時は覚えていなかった。薫子だっ
て知っているはずがない。

私は降参しようとして薫子の顔を見た。彼女はニヤニヤしながら私を見ていた。そうか。生まれた日か。
七月十日……。今日は私の誕生日だ。

私は教室の後ろの左から十番目のロッカーに向かった、と同時に廊下の方から話し声と靴音が聞こえた。

「お父さん隠れて」

薫子は私を掃除用具用のロッカーに押し込んで、「女子トイレにいる」といって出て行ってしまった。そ
して、代わりにサッカーのユニフォームを着た男子高校生の集団が入ってきた。静かだった教室が一変し
て雑音で溢れ返る。汗臭さが私のいるロッカーの中まで入ってきた。私は狭いロッカーの中で体を縮めな
がら、胸がむかむかしてくるのを感じた。薫子はトイレで何をしているだろう。可哀想に。寂しいだろう。
寂しいだろうに。

男子生徒達が教室を出て行ったのを確認すると、私はロッカーから飛び出て女子トイレへ向かった。

「薫子」

呼んでも返事はない。私はピンク色のタイルが敷き詰められた女子トイレの中に入っていった。

中には個室トイレが五つ並んでいたが、どれにも薫子はいなかった。

「薫子……、薫子！」

私は走って教室に戻った。そして左から十番目のロッカーに手をかけたが開かない。

「薫子！ 開けてくれ！ 頼む。薫子！ 薫子！ 開けて！ 俺も入れてくれ！」

私は何度も叩いたが、扉は頑なに私を拒絶する。

「お願いだ！ 開けて！」

口を閉じたまま。

私が公園に戻ったとき、空は真っ暗になっていた。寒い。

私はベンチに座った。

「お父さん、ソフトクリーム買って」

男の子の声が聞こえて、顔を上げると、電灯の下でソフトクリームを売っている移動車があり、手をつな
いだ父子がその前に立っていた。私はその光景をぼんやり見つめた。父親が金を差し出し、車の中から手
が伸びてきてそれを受け取る。そして、ソフトクリームを持った手が出てくる。父子は公園の暗闇の中に
消えていく。その後ろ姿を移動車から身を乗り出した店員が眺めていた。薫子だ。

「薫子！」

私は彼女のもとに駆け寄った。

「お前こんなところにいたのか」

「あれ、今日はバイトだって言わなかったっけ？」

「ああ、そうか。すっかり忘れていたよ」

私達は顔を見合わせて笑った。

「じゃあ二本貰おうかな」

「了解」

私は働く彼女の背中を見つめた。彼女ももう大人だ。寂しいような嬉しいような不思議な気分だ。

「はい、どうぞ」

「ありがとう。四百円だな」

私は四百円払ってソフトクリームを一本だけ受け取った。

「今はいいよ。工作中だし」

「いいじゃないか。誰も見てないから大丈夫だって」

「工作中ですので結構です」

金髪の店員が迷惑そうな顔で答えた。

私はベンチに座ってソフトクリームを食べた。すると、移動車の中から薫子が出てきた。

「ごめーん、今バイト終わったー」

「ほら、早く食べないと溶けちゃうぞ」

「ありがとー」

「よ」

サングラスの男が目の前に立っていた。指を四本立ててこちらに突き出した。

「後四日。お前毎日ここでぼんやり座ってるけど金は集まってんのかよ。聞けば、一日中ここにいるって話じゃねえか」

私は男を睨みつけた。

「お、ソフトクリームじゃねえか。二本持ってるなんて気が利くな。あいにく俺はそれが大好物なんだ」

そう言って男は手を伸ばしてきた。私はその手に唾をかけた。

「何すんだてめえ！ ぶち殺すぞ！」

私は両手にソフトクリームを持ったまま男の腹に蹴りを入れた。男は腹を抱えて後ろによろめき、そこにもう一発加える。男は情けない声を上げて地面に倒れ込んだ。

「これは俺の娘のものだ！ お前にやるつもりはない！」

男は地面にうずくまって、震えながら、「ごめんなさい、ごめんなさい」としきりに呟いている。

「第一、俺はお前に金を借りた覚えはない！」

男は子供のように泣き始めた。私は男の胴体を何回も踏みつけた。途中で何か音が立てて折れるような感触があったが、構わず足を降りおろした。

男は腹を抱えながら逃げていった。

私は振り返って、

「ほら、食べなさい」

と言って、電灯の下でソフトクリームを虚空に差し出している自分に気がついた。私の右手の中に収められたそれはみるみるうちに溶けていき、私の手をつたって地面に落ちた。そこに蟻が群がる。

「薫子……」

私は地面にできた白い点を渦のように取り囲む大量の蟻を見つめた。溢れかえっている。溢れかえっている……。私はその黒い渦を踏みつけた。

「畜生！ 畜生！ 畜生！」

蟻は弾けるように散らばっていく。

「畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生！」

一匹残らず潰してやる。私はソフトクリームが腕を伝っているのも忘れて、夢中でそれらを潰し続けた。蟻の一匹と目が合った。

「お父さんやめて！ やめて！」

ああ、薫子か。すまん。

逃げ惑っていた薫子全員が一齐にこちらを振り向いて、口々に「やめて」と叫んだ。

「すまなかった。疲れてるんだ。だから、ほら、泣かないで。今、アイステイーを買ってきてやるから」

薫子達は口を揃えて「ありがとう」と言った。

私はいつもの自動販売機に行った。あの薫子との思い出の――。生クリーム少なめ、砂糖多めでアイステイーのボタンを押す。機械は沈黙したままだった。私は思いっきり機械を殴った。しかし沈黙。

「早く出せ！ 早く出せ！ 早く出せ！」

紙コップが落ちる音。取り出し口を覗くと、確かにそこには白いコップがあった。自販機の中の機械がいつも通りの鈍い音を立てて働く。不思議とこの音を聞くと落ち着く。そして、液体がコップの中に注がれる。――血だ。

機械は私に赤い液体を満タンにした紙コップを寄こした。

「薫子。お前はもう――」

液体の表面に薫子の姿が映る。

「何言ってるの？ 早く家に帰ろうよ。お母さんが待ちくたびれてるよ！」

そうだな。今日はもう帰ろう。

「一番嫌いなことはなんですか？」

「え？」

聞き間違えたかと思ったのだ。

「あなたの一番嫌いなものを教えてください。」

「嫌いなもの？」

「はい。」

「これはいったい何のアンケートなのかな。」

「社員アンケートです。」

その女性は淡々と言った。

「うーん。なんでもいいの？」

「ええ、なんでも。」

「僕は狭い洞窟の中が嫌いだな。」

「洞窟ですか。」

「そうなんだ。僕は閉所恐怖症に近いものがあるからエレベーターとかも嫌いかな。」

「洞窟にエレベーター。」

「子供の時、洞窟の中に入ってレポートする番組をよく見てそのリポーターの気持ちを察するとすごく恐ろしくなったんだ。その時の衝撃が今でも残っているんだと思う。」

「まあ洞窟というのはあまり現実的ではないですが私にもその気持ちはわかります。エレベーターなどの密閉空間には神秘的なエネルギーを感じます。」

「そうだね、密閉空間というのは何かあるのかもしれない。」

「ところでこの会社の最近の噂知ってますか？」

「噂？」

話題を変えるのがうまいな、と思う。

「この会社が不正な遺伝子組み換えをしているという噂です。」

「まさか。」

「かなり嘘くさいですが、いろいろなクローンを作ったとか。」

「うちにそんな技術ないよ。たぶん。」

「どういう訳かは知りませんが、ダチョウの卵の遺伝子を組み替えて人間を作ったという噂が一番話題になっています。」

「ダチョウの親はきっとびっくりするだろうね。自分の卵から人間が出てきたりしたら。」

「ダチョウがかわいそう。」

その女性は少し悲しげに言った。僕はその女性が感情を出したので少しほっとした。正直淡々とやることだけやるという態度は、肩身が狭くなってこっちとしてもやりづらいのだ。

「所詮は噂さ。いくらうちが遺伝子専門の会社だからって今の技術はそこまで発展してはいない。なんでそんな噂なんかが流行るんだろ。」

「噂というのは何の理由もなくやってくることもあるのかもしれませんが。噂で会社のイメージが悪くなるというのは困りますが。」

「確かに困るなー。」

僕は笑いかけたが、その女性はにこりとしなかった。

「うあ～～。」

ため息とも思われる声を発してみる。寒さで目が覚めた。腰も痛い。ついでに首も、痛い。ここはいつたどこだろうか。視野全体が暗くはっきりとしない。だが今自分が寝転がっているのは岩の上のようだ。外ではない。と思う。風が無くじめじめしている。どこかの洞窟の中か？　なんでこんなところで寝ているのだろう。少し、そして結構焦る。体を起こしながら記憶をたどってみる。が、わからなかった。どうしても思い出せない。だとしたら今の自分にできることは冷静になり、現状を把握することだ。まず、目の前がうっすら見えているということは、どこから光が来ているということだ。うまくいけばそれを辿ることで外に出られるかもしれない。が、その希望はいとも簡単に潰える。少し先に光源が見え、それは蠟燭の光だったということが分かったのだ。次に考えるべきことは、なぜ蠟燭の灯がともっているかということだ。俺が点けたのではないとしたら、誰か他の人間が点けたということになる。なぜ？　蠟燭だけあって人はいない、そんなこと普通はない。それだと蠟燭を灯した意味がないし、灯しっぱなしにする意味もない。じゃあなんで蠟燭なんか灯してるんだよ。

蠟燭を灯した奴が自分のためにやったんじゃないとしたら、俺、または第三者のためにやったということだ。何をしたかったんだろう？　さっぱり分からん。

蠟燭の長さからして火はもう一〇分くらいは燃えているだろう、とかいろいろ考えていたのだが、ふと目を向けると、リュックサックが落ちていることに気付いた。中を開けると水と乾パンとライト付きヘルメットが入っていた。リュックサックに見覚えはなかったが、これを利用しない手はない、と思った。ていうか利用しなきゃ暗闇で死ぬし。これだけあれば数日間は生き延びられるだろう。

俺の心は躍った。繋がっている、と思った。偶然にしても、誰かの意志にしても、まだ繋がっている。俺は生きている。この洞窟、何としても抜け出してみせる。だって俺、冒険とか好きだし。

僕はあの後、何とかして彼女を笑わせようと頑張ったのだけれども、結局彼女は笑わなかった。そんな感情を表に出さない態度は僕に病気で死んだ姉のことを思い出させる。

実は結構、彼女の言った噂のことが気になっていて眠れなかった。どうしてダチョウの卵から人なの？　なんでダチョウ？　そしてあれはいったい何のアンケートだったのだろう？　嫌いなことをしゃべらせたってことはそれをするってということなのかな？　なんのために？

心当たりがないわけではなかったけど、そんなはずはない。そう信じたい。

僕は人一番正義感が強い。子供のころからまじめだった。正義は勝ち、悪は倒される、そんな現実を信じていた。いや、今も信じている。現実はそのあるべきだし、たとえ悪を倒せなくとも、悪を嫌う心は持っているよと思うている。そしていつでも希望を忘れないようにしようと思っている。たとえ今が苦しくとも、そのあとには必ず幸せが来る。恐怖の洞窟の中にも洞窟を出れば、ルドベキアの花畑がある。そういう設定を僕は望む。ルドベキアは花言葉で選んだ。公平、立派な、そして正義。僕にピッタリでしょ？

僕がこの会社、GE (Genetic Engineering) に入ったのは、GEならダチョウの卵から人の子を産むこともしうだからだ。詳しいところはわからないが、この会社はあらゆる大学、研究所と関わっている。設備もお金もある。だからどんな技術を隠し持っているかはわからない。クローンくらいなら作っているかもしれない。そしてもう一つ理由がある。それは姉のことだ。

姉はもともと病弱でそのうえ、臓器の奇形が起きるとい病気が彼女の中ではかなり深刻になっていた。おそらく助からないのではないかと知らされた時の僕のショックは大きかった。姉が死んでしまうという

のは受け入れがたかったし、自分には何もできず、希望も持てないという現実がつかった。そんなとき手を差し伸べてきたのがGEだった。姉の病気が遺伝子の異常によるものだとしっかり説明してくれたし、姉の病気を絶対治してみせるとも言ってくれた。僕はそれを信じた。最後の希望に感じられたから。

彼女は助からなかった。GEの技術をもってしても救うことができなかった。いや、GEはわざと姉を殺した。自らの研究のために。姉の仇を撃つために僕はGEに入ったんだ。そして今もまた僕は希望を見失わない。姉さん、あなたのために僕、頑張るよ。僕の一番の長所は、希望を持ち続けることと、正義感なのだから。

自分の決心を確認しなおしたとき、突然携帯が鳴って、はっとした。

「もしもし。」

「GEです。」

「ああ。」アヒルの彼女だ。僕にアンケートをした、彼女。

「明日の朝七時に社に来て下さい。社長から緊急の用事があなたにあるそうなので。」

「君が僕にかけてくるとは思わなかったよ。」

「たまたま私しかいなかったの。」

「それで、緊急の用事っていったいなんだろう。」

「私にはわかりません。」

そりゃそうだ。彼女がそんなこと知っているわけじゃないか。

「わかった。明日の朝七時に行きます。」

「はい、待っています。」

そこで電話が切れる。僕は嫌な予感がした。やっぱり僕の素性ばれちゃったのかな？ そう思いながらふと気づく。アヒルじゃなくてダチョウだったな。

リュックサックには必要最低限のものしか入っていなかったから、一応食料は手に入れたが、次にどうしたらいいか分からなかった。第一ここは迷路ではなく洞窟なのだから出口があると考えること自体間違っているのかもしれないが、男はそんな風には考えない。何せ楽観主義者だから♪ しかも生まれつきの♪

そう考えながら俺は蝋燭の火を眺めていた。蝋燭はいつまで燃え続けるんだろうか？ ぼうっとしていたから時間はわからないが、蝋燭もかなり短くなっている。今にも燃えつきそうでもある。

火は人類にとって特別なものだと思う。マッチ程度の火でも少女は虜になった。確かそんな童話があったはずだ。火は見ているだけで素直になれる。昔のことを思い出す。

小さいころは、よく花火をした。と思う。線香花火が好きだった。線香花火以外の手持ち花火は、煙が大嫌いだった。明るすぎるし。打ち上げ花火は自分だけで楽しめないから嫌いだった。ほかの人も大勢見ている花火をみんなして、きれいだね、なんて言い合いっこしてもあんまりおもしろくなかった。線香花火は小さいのに、打ち上げ花火のように威勢のいい火花を散らしている。小さいのに大きい。そして俺はその大きな花火を持っている、ということが俺を興奮させた。ふっふっふっふっふ、線香花火はすべて俺のものだ。そうやって線香花火を独り占めすると、みんなに嫌がられる。

火が消えた。何の前触れもなく、唐突に、消えた。終わりというのは何の前触れもなく訪れるに違いあるまい。

俺は立ち上がり、歩いた。初めほどの興奮はもうなかった。火を見ていてなんだかしんみりしてしまった。だが歩かなければならない。今は歩くことしかできないから。ヘルメットをかぶり、出口を目指す。

姉は普通の人間だった。精神面での異常はなかったし（少なくとも僕にはないように見えた）、見た目

だって普通だった。むしろ美人に分類した方がいい。と思う。あっさりした顔立ちで目が大きめだった。何も考えていないかのように、何をする時にも全く表情を変えない。姉は病院へは時々行ったけど、学校にも普通に行った。健常者とまったく変わらなかったとっていい。そもそも僕は彼女が深刻な病気を抱えていることすら知らなかったのだ。だから僕も姉とは普通に接した。仲の良い兄弟になろうとした。でもうまくできなかった。姉はいつも僕に冷たかったのだ。昔の姉は僕の言うことなど何も聞いてくれなかった。僕が何を言っても軽い返事しかしないので無表情のまま嫌味のようなことを言った。その時まだ僕は嫌味の意味をよく知らなかったから、ただ単に怖かっただけなんだけれども。だから同じ家族ではあったけれど、兄弟とは言えないような気がしていた。姉のことは好きだったけれど。

そんな姉から僕に直接電話が来た時があった。苦労して大学に入学し、生活にも少し慣れてきた時だ。姉の方から、久しぶりに会いましょう、と言ってきた。そして僕に初めて姉の病気のことを教えてくれた。僕はどうして今まで教えてくれなかったのかと言おうと思ったが、やめた。両親も姉もいろいろ苦しんできたのだから。その時から僕は姉とも何回か会って話をしたりして、はたから見ればそれは仲の良い兄弟であったように見えたと思う。姉は、僕が大人になっても感情をどこにも出さなかったが、嫌味を言うことはなくなった。そしてその代わりに時々いやらしく笑った。どこかで見たことのある悪者みたいな笑い方は、本心なのか作った表情なのか分からなかったが、姉らしくて好きだった。重い病気を抱えているのにまったく動揺や焦りを見せない姉は少し奇妙でもあったが、笑った姉はもっと奇妙だ。達観しているように見える。あるいは姉は元々奇妙なのかもしれなかった。

一度だけ、姉があまりにも意地悪なので、あれは人間でなくて悪魔だ、と母さんにこっそり言ったら、本気で同情されたので困った。それから何度か姉の皮膚の下から悪魔が出てくるのを想像したが、いまいち似合わなかった。姉は人間だけど達観していて人間でないようでもある。そういうところはなんか不思議な人だったな、といまさらになって思う。でも僕はそんな姉で十分好きだったのだ。

会社の前に彼女が立っている。僕を直視している。僕も彼女を直視する。「対決」という言葉が頭に浮かんだ。今から僕は彼女と対決をしなければならない、そんな気がする。

俺には記憶がない。と思う。この暗闇に入ってくる前のことがわからないからだ。まだあまり歩いていないだろうが、早くも嫌気がさしてきた。分からないことだらけなのだ。それこそ冷静に考えれば俺の助かる確率はひどく低いもののように思われる。実のところ俺は探検とかそういうアドベンチャーは得意でない。と思う。出口も分からない場所をうろろろすることは何かを浪費しているような気がする。こういう場合たくさん動いてたくさん食べて早死にするか、あまり動かず限られた食料を少しずつ食べて死ぬかどっちがいいんだろうか、と思う。(どっちにしても死ぬと思って、はっとする。)自分で出口を見つけるか、救援が来るのを待つか、だ。ふつうならだれもが前者だろう。と思って、自分も前者にすることに決める。

知恵を振り絞った。サバイバルの番組はテレビで何度か見てきた。その時の知識はこういう時にこそ使うべきなんだ。そう思って目を瞑り記憶をたどる。……。だめだ。洞窟の出口を見つける方法なんて、テレビでは教えてくれない。きっと洞窟をさまよいつけるなんて進展がなくてつまらないからテレビにはしないんだな。くそ〜！ 歯ぎしりする。ぎりぎり。

「うあああ〜。」

走った。目を開けないままで、走った。岩肌にぶつかるのが怖い。目を開けそうになる。足を止めそうになる。

「っつ。」

痛っ。は言葉にならなかったが、そのままその場に倒れた。起き上がるのも面倒だったから、一回寝よ

う、と思ってそのまま目を閉じた。

「待っていました。」

「待たせちゃってごめん。」

「いえ、それはいいんです。それより乗ってください。」

と言って彼女は横に止めてあった車に乗り込んだ。僕も助手席に座る。僕が座るとほぼ同時に彼女はアクセルを踏んで車を走らせた。

「いったいどこへ行くんだい？ 電話では社長から緊急の用事があるってことだったと思うけど。」

僕は彼女の乱暴な運転に少し驚きながらも声を抑えて聞く。

「緊急の用事がありますけど、その前にあなたと少し話でもしようかと思って。」

「え？」

「気づいてくれると思ったのに。あなたは私のたった一人の兄弟でしょう？」

ギクリ、とする。悪い冗談だ。

「姉さんは死んだよ。君は僕の姉さんじゃない。」

「あなたわざわざGEに入り込んでまで、私の仇を討とうと思ったくせに、やっぱり何も知らなかったのね。」

「違う。性格は似ているけど、見た目だって全然違うじゃないか。大体君は僕より若く見える。」

「GEの技術があれば体を取り換えることなんて簡単なことなんじゃないかしら。」

「……」

「あなたこの会社を甘く見すぎなの。そんなことだから私は生きながらえることになったんじゃない。」

「そんな現実があり得るのか。姉さん。」

「あり得るのよ。あなたが知らないだけで。」

「姉さんがたとえこんな形でも生きていたならば、僕のすべきことはいったいなんなのだろう。」

「人の体内、脳内を勝手にいじることはよくないことでしょう。いじられる方は何一つ知らないのに。でも同時に、GEがいなければ私はそのまま死んでいたでしょうね。あなたの正義はいったいどっちなのかしら？」

「正義。」正義は勝ち悪は倒される。勧善懲悪。だがもし悪がなんなのか見極められないならば、勧善懲悪は成り立たない。そんな時は希望を見失わないようにするべきだ。だとしたら、GEが改心してくれることを僕は願う。

「僕は……」

「あなたの意見なんてどっちだっていいのよ。どうせあなたには何もできないんだから。」と彼女は僕を制した。

「あなたはもう何もできないわ。私が確保しているんだから。」

「僕を殺す気か。」

僕はあわてた。車は高速を走っていたが、あと十分もかからずに一周して会社に戻ってしまうはずだ。たまたま近くにはほかの車がない。だが今ここから飛び降りるのはやはり得策ではないだろうか。

「無駄よ。ドアのロックはそう簡単に開かないの。」

そうやって姉と思われる女性は拳銃を向けてきた。顔こそ違えど、表情は前を向いたまま全く動かない。笑いかけても来ない。別に面白いことでもないと思うけど。

「姉さんは僕の味方じゃないの？」

「私があなたの味方だったことなんて今まであったかしら。」

「僕は死ぬのか？」

「あなたがどうなるかまで私は知らないけど、仕方ないでしょ。GEをなめていたあなたがいけないのだから。」

「姉さん、僕が死ぬかもしれないのにいくらなんでもひどいじゃないか。」

僕は心にもないことを言ってみた。姉さんは、僕の頼んだことなんて一度として聞いてくれたことがなかったのだから、こんなこと言っても無駄だと本当はわかっていた。けど死ぬなんてありえない。死にたくない。

「あなたはもう私の弟じゃない。私のからだはそもそも人間でもないのよ。」

「？」

「ダチョウの受精卵の核を改造して人間のからだにしたらしいわ。そしてそこに人間の記憶とか意志とかそういうものを丸々押し込んだのよ。私はGEの実験の一つの成功例ってわけ。」

「……」

「血のつながりもないあなたとはもう他人なの。」

「他人だから助けてあげられない、と？」

「私はむしろあなたにも一回死んでもらいたいのよ。あなたは何も知らない子だから少し痛い目を見ないと。」

「姉さんは冷たい。」

僕はあきらめた。たぶん僕は力づくでも姉には勝てない。いくらなんでも勝ち目がない。姉の抜かりのない性格は昔から知っていたし、初めから一対一でない。僕はGEをも相手にしてしまったのだ。

どれくらい眠っていたか分からない。が、目が覚めたので、起き上がった。頭はずきずきしたが、血は出ていなく、むしろ寝たことで気分がすっきりした。よし、また歩くか、という気分さえなつた。リュックサックを拾い上げようとした時、リュックサックにテープでメモ書きが貼ってあることに気付いた。ん、これは？

「もう少し先に行くと少し急な坂道があるので、そこを上に登ると出口があります。」

ちょっとなれなれしい感じがする書き方だと思った。何の前触れもなく出口の場所だけを説明しようとは、ふてぶてしいな。こんな説明書きを残すくらいなら初めから俺をこんなところに閉じ込めるなよ、と思いつつも、顔がにやける。

俺の推測では、俺はここに何者かによって閉じ込められた。と思う。それなのにその何者かは常に俺を監視していて、俺が何か困ろうものならば手助けをしてくれている。まず蠟燭を点けて俺をリュックサックのもとまで導いた。そしてリュックサックを与えることで俺のやる気のある程度まで高めた。だがそれでも俺があきらめてくるとついには出口を教えてきた。そして俺を出口まで導くのだろう。何がしたいのかはわからないが俺がこの迷路をがんばって抜け出すことをどこかで眺めて楽しんでいるのだろう。向こうはゲーム感覚なのだ。一つ一つヒントを与えてゲームを解かせようとしている。くそっ、焦って損した気分だ。これがテレビの番組になった時のために視聴率が低くなるようなことばかりしてこれから進もう。

そのメモ書きに書いてある通りに歩いた。(学生時代大喧嘩して結局今でも仲直りできていないやつの悪口を言いながら歩いた。結構教育に悪い言葉を使ったから子供のいる家庭はあまり見れなくなるだろう。)するとメモ書きの通りに少し急な坂があった。が、かなり急だ。結構湿気で滑りやすそうでもあったから登れるかどうかは不安だった。ていうか登れなかった。だがこれがゲームならクリアする方法はあるはずだ。まず付近の壁を探してみた。しかし仕掛けらしいものは何もない。どうしようかと思案していると、突然足場が盛り上がった。驚いてこけそうになる。地面が盛り上がったというよりは自分だけが浮き上がった、

という感じだ。靴の裏を見ると金属のとげが出ていた。おぉー、これはよく登山とかで使うようなやつだな。確かにこれがあれば登れるかもしれない。そう思って意気揚々と登った。

思った通り、意外と簡単に登れた。登ってから、自分の愚行に気付いた。こんなに意気揚々と登ったら視聴率を上げてしまうではないか（次は下ネタを言いまくろう）。くそっ。

坂を登り終わると頑丈そうな扉があった。ここが出口だとは思ったが、開け方を知らなかったのもちょっと不安になっていると、扉は自然に開いた。なーんだ、自動ドアだったのだ。近づけば、開く。すっかり自信を取り戻して、胸を張って下ネタを大声で言いながら中に入る。

彼女に後ろから拳銃を突きつけられながら、僕は社長室に入った。

「いやいやご苦勞、ご苦勞。」

社長は太った体をこちらへ向けた。ぶっちゃけ面倒くさい、という感じに振り向いた。

「捕まえました。」と姉が言う。

「君が何の目的でうちの会社に入ってきたか、というのはもう誰もが知っていることでね。一応君に選択権を上げよう。そのまま死ぬか、それとも我々の実験材料となって死ぬか。」

僕は社長をにらむ。こんなふざけた男に死ぬと言われるなんて、屈辱を超えて、殺意すら覚える。姉さんはどうしてこんな男のもとでいつまでも働いているのか。

「僕は普通の人間です。姉のように特殊な持病を抱えた人間じゃないんです。僕なんかじゃ実験材料にもなりませんよ。」

「君がどんな人間であろうと、利用価値はある。」

外を向いて耳を掻きながら言うので、本当に殺そうかと思った。絶対に呪い殺してやる。

「普通に殺してください。」

「そうか、残念だ。」

社長はそう言って、手を叩いた。すると部屋に黒サングラスが二人入ってきて、僕を押さえつけた。

「連れて行け。」

社長は最後まで面倒そうに言った。どこか上の空のような感じがあって、最後までむかついていたが、もう何もやる気にはならない。僕は死ぬんだろう。

いつ間違ってしまったのだろう。ルドベキアの花言葉は、公平、立派、正義、正しい選択。僕はその理想像を掲げているだけで、あるいは、自分がその理想に近づいていると勘違いしているだけで、実際にはあまりにも遠くにいたのだ。姉の仇を取るならもっと別の方法を取るべきだったのだ。GEを軽く見ていた、それが僕を破滅に導いたんだ。

中はすごく変だった。医薬品のようなにおいがして、どこかの研究所のような雰囲気だ。左右にいくつも部屋があって、壁全体がメカっぽい。しかしそれと同時にこの景色は以前どこかで見たようだとも思った。

中学生のころだ。学校の廊下で友達と一緒に歩いていた。その時も二人で下ネタを発していた。我々二人は小学校からの友達で、仲が良く、かつ同じ女の子が好きだった。

その場面しか覚えていない。なんでそこだけ？ でもそこしかないのだからしょうがない。きっと俺にとってその友人はそういうやつなのだ。その友人とはそのあと大喧嘩して、それっきりろくに話さないまま彼は引っ越してしまった。あいつは今でも嫌いだ。

適当に気に入った部屋に入った。すると中は不思議な部屋だった。床も壁も天井にも、部屋一面にカラフルなタイルが貼られている。入った時に感じた薬っぽい匂いが少し強くなったことは嫌だったが、視覚的にはすごくきれいだった。そしてとても広々としている。俺は思わず中へなかへと進んでしまった。奥

に入るとタイルの一つ一つがより輝いて見え、美しい。僕は理由もなしに壁のタイルを一つ押してみた。強く、ゆっくりと。するとばね仕掛けでタイルが前に飛び出し、奥が引き出しのように出てきた。すると引き出しの中に詰まっていたであろう薬品のにおいが大気にあふれ出し、僕の鼻を刺激した。

「私の弟をどうするつもりですか。」

「さっき君はもう弟でないといっていたじゃないか。」

社長は弟を始末して気が楽になったのか、少し顔をほぐして言った。

「ええ、確かに血のつながりはありませんが、あれは私にとって弟です。」

「君は彼を見捨てていたのかと思ったがね。」

「あれは私にとっての彼への愛情表現です。」

「まあいい。すべて終わったことだ。」

「それで？」いつの間にか、ため口。

「か、彼はもちろん我々の研究に生かさせてもらうよ。実験台として。」

彼女の突然の語調の変化にたじろぐ社長。

「そうですか。」

「そのまま殺してほしかったかい？」

「別にどちらでもいいんです。ただ……」

「ただ？」

少し間を開けて、

「彼、私の正体に全然気づかなかったでしょう。だからその罰として、どうせ死ぬのならできるだけ残酷に殺してほしいな、と思ひまして。」

そう言って悪者の顔をして、彼女は社長に笑いかけた。社長は悪魔だと思った。

男はその刺激臭とともにあらゆる記憶を思い出した。そして、なぜ自分がここに至ったのかを知った。俺は（僕は、か？）GEの実験台として、記憶を奪われ、そして大嫌いだっただけの洞窟へ入れられたのか。いろいろよく分からない矛盾点はあるが、そういうことらしい。僕も姉と同じようにGEが作り出した一つの成功例なのかもしれない。あるいは失敗作。

ただ茫然とした。どうしていいか、分からない。動けない。なんで？ という疑問も言えない。立ち尽くしてしまった。ぼかんとしたあいた口がふさがらない。

大体のことが分かった後でも、不安から解放されたすがすがしい気持ちはない。事実が込み合っていてうまく整理できていないというのもあるだろうが、そうではなく、なんというか暗い気持ちしか残らなかった。部屋を出て、廊下を歩く。これから僕は（俺は、か？）どうなるのだろうか。不安とも言えるような言えないような感覚を覚える。通路の一番先につく。行き止まりだ。目の前の壁には大きな扉がある。ここだけ自動ではなく、手動らしい。『引く (pull)』と書いてある。この扉の向こうには何があるのだろうか。花畑はないんだろうなと思うと、暗くなる。

この研究所に入ってから一人として人間に会わなかった。きっとここから先もないんだろう。一人で努力して、一人で生きていく。もう僕に希望は見えない、気がする。だけどそんな世界で僕は生きていくんだな、と思って、僕はその大きな扉を引く。

夏のある朝、寝苦しさに目を覚ますと、隣にいるはずの彼女の姿がなくなっていた。狭いワンルームの部屋に隠れる場所などない。トイレにも気配はなく、半身を起こすと、玄関の鍵が開けばなしになっているのが見えた。延ばした指先に固い物が触れ、鈴が笑い声を立てる。それが何であるか見たくもない。そんな暑さだ。

まったく、別れ話なんて口ばかり。その後はしっかり感じていたくせに、朝になったらこれだ。女は分からない。

シャワーを浴びて、二人分の汗を流す。肩にかかる長髪は、バンド活動のためとはいえ、やはりうっとうしい。雇ってもらえるバイトも限られるし、なにより、他のメンバーが考えているほど長髪は評判がいいわけではない。

「雑誌をってみろよ。ほとんどが長髪じゃないか」

残念ながら俺たちは雑誌に載るようなバンドじゃない。だったら、雑誌のまねをしてもしょうがないだろう。

ドライヤーからの冷たい風を扇風機代わりに、一向に引きそうにない汗を無視して冷蔵庫を開けると、飲みかけのポカリの横にミスドの袋が入っている。彼女はドーナツが好きだった。俺は、真ん中に穴が空いているのが、なんともケチくさくて嫌いだったが、彼女はその穴が好きだった。

「穴？」

「そう、穴」

「食べるの」

「ちゃかさないで。ドーナツの穴はね、何でも見通せる魔法の穴なのよ」

彼女は少しばかり夢見がちなところがあった。俺の長髪をポニーテールにして、白い肌に薄化粧を施して、一体何を考えていたのだろう。そんな状況すら楽しめた俺もまた。

「どれ——本当だ。一見清楚なのに、淫らで淫らで仕方ない本当の姿が見えた」

「冗談じゃないのよ」

俺の覗いた穴から指を挿し入れ、それを引つけて口に運ぶ。フレンチクーラーだ。

「五つ、必要なの」

そう言えば、彼女と出会ったのは、俺の髪がまだそれほど長くなくて、ミスドでバイトをしていた時だった。フレンチクーラーとかオールドファッションとか、なんだか地味なドーナツを五つ注文して、一人っきりののに、持ち帰りじゃないと言う。財布を取り出す時、鈴の音が耳についた。俺のキーホルダーと同じ子供じみた音だった。

「あの子、何してんの」

当時付き合っていた彼女が、隣のレジから指摘した。皿に五つのドーナツを立てて並べた彼女は、その穴から窓の外の町並みを眺めていた。

「ごめん、俺、バイトやめるわ」

そう言えば、店長と仲の良かった彼女に口をきいてもらって、無理やり雇ってもらったんだったな。あいつは、店長に好かれてるって分かってたのかどうなのか。

奥で着替えた俺が戻ってきた時、客席に彼女はいなかった。ドーナツは五つともなくなっていた。慌てて店の外に出ると、信号待ちをしている彼女を見つけた。

「お客様」

「え」

「口元に、砂糖が」

そのキスは甘かったとは言い難い。なぜなら、人違いだったからだ。

叫ぶ女の子を置いて、俺は一目散に逃げ出した。地元じゃなかったから、どこをどう逃げたのか覚えていないが、気づいたら涼しげな木立にいた。ベンチに腰かけて、荒い息を整えながら空を見上げると、鈴の音がした。

「ずいぶん軽いのね」

「身軽、ってことかな」

彼女は唇を重ね、そこからポカリを流し込んできた。生ぬるい。

冷蔵庫から取り出したポカリはよく冷えている。思い返してみても、彼女が何を考えているのかは分からない。彼女には何かが見えていたのだろうか。五つのドーナツ越しに。俺にも何か見えるだろうか。そう考えながら、ミスドの袋を取り出した。

袋を開けると、ドーナツは四つしかない。彼女が食べたのか。そう思いながら袋を破ると、きちんと並んだ四つの脇に、小さなドーナツが隠れている。新商品？

つまみあげると、それは耳だった。

俺？ 髪をき分けて探すが、右耳があったはずの場所には何もない。耳も、穴も、何もない。つるりとした皮膚に覆われて、頬が何食わぬ顔で侵食してきたかのような。

五つ目の穴。俺の耳。何が見えるっていうんだ。鏡に映る俺の蒼褪めた顔。見てやろうじゃないか。四つのドーナツと俺の耳。五つの穴の向こうに、何が見える。鏡に映った俺の、呆けた顔以外に何も見えるはずがない。

耳の穴は小さい。整然と並んだ四つのドーナツに貼りつけるように耳を並べると、小さくなった穴の向こうで彼女が笑っている。だが、その表情に不自然なものを感じた俺は、もっとよく見ようと眼を近づけた。

それは俺だった。そうだ。俺は彼女になりたかったのだ。

そして、彼女は俺を彼女にしたかったのだ。

キーホルダーを引んで鍵の開いたままの玄関を飛び出すと、彼女が立っていた。ポカリで頬を大きく膨らませて。俺は彼女を抱きしめた。二人が一人になるぐらい強く抱きしめた。口から流れ込んできたポカリは、二人の体液を一つにした。鈴の音が足元で笑った。

「見えるんだよ」

洋一は母の大きく膨らんだ腹を見つめた。頭を下に向けた赤ん坊が目を瞑って母の体の中に居座っている。彼は身震いした。母親の腹の中が透視できたからではない。母親の体の中のそれが「ひっひっ」と、喉をつぶされたような声で笑っていたからだ。

「お母さん。こいつは僕を殺しますよ。きっと。」

「あら、なんで」

「見えるんだ。ほら、僕を嘲笑ってる」

「笑えるわけがないでしょう」

「いや、これは笑っています。僕を馬鹿にしている。僕を陥れようとしている目つきだ」

「お腹の中の赤ん坊は目を開くことはできないわ」

「それはお母さんの勝手な思い込みだ」

「そんなことはないわよ。水の中にいるのだから目は開けません」

最初はおかしそうな顔で返答していた母も、呆れて適当な言葉を返すようになったが、それでも彼はしつこく付き纏(まと)った。

「とにかくこいつが生まれたら僕はもう終わりだ。お母さん、お願いだから、それを下ろしてください」

彼女は顔を赤くして息子を怒鳴りつけて、彼は右頬に平手打ちを食らった。たまらなくなつた彼は自分の部屋に逃げ込んだ。

「全く。下ろすなんて言葉、どこで覚えたのかしら……」

と彼女がぶつぶつ言う声を彼は部屋の中で聞いた。

――それにしても大変なことになってしまった。確か、後二か月で生まれるってお母さんは言った。あいつが腹から出たが最後と思っていいただろう。これはおちおちしてられないぞ。

彼は床にしゃがみ込んで頭を抱えた。

――方法は三つだ。一つは母に赤ん坊を下ろすことを勧めること。これは今失敗した。二つ目は生まれてきた赤ん坊をどこか遠くに捨ててしまう事、もしくは殺すこと。しかし、彼が外に出てきた瞬間にどうにもならなくなってしまうかもしれない、というのが怖い。だから、僕は三つ目の方法として、母を、できるはずがない。

彼は頭を抱えながら部屋をひとしきり徘徊した後、また母のいるところに戻った。

母は俯(うつむ)いて裁縫をしていた。それが生まれてくる赤ん坊のためのものだということを理解して、洋一は恐ろしくなり、裁縫道具を取り上げようと足を踏み出した時、

「ひっひっ」

例の声が部屋の中に響いた。断末魔のようにも聞こえるが、それは確かに笑い声で、それは確かに洋一に向けられたものであった。

「今のは……お母さんですか」

「何が？」

「声だよ」

「何も言っていないわ」

彼女が怪訝(けげん)そうな顔をして見つめるので、洋一はまもなく恐ろしくなって外に飛び出た。

外は真つ暗闇で周りを見渡しても誰もいない。辺り一面が田んぼなので夜になると本当に何も無いとい

うところだというのが昼よりも強く感じられる。彼は家を出た瞬間に後悔の念に襲われて、やはり布団の中に蹲(うずくま)っていた方が良かったのではないかと考えたが、家の中にはあれがいる。

彼は足を舐められたような気がして、「ひゃっ」と一声上げると畦道の暗闇の中へ飛び込んだ。

足場の覚束ない畦道を全速力で走っていると、体にぶつかってくる風が人の手に思えて、彼は何度も足を止めた。そして、止まったら止まったで気持ちの悪い浮遊感に弄ばれ、あわてて走り出す。その繰り返しだった。体中から嫌な汗が噴き出して、それが父親のお下がりのシャツに纏わりつく。途中から目をつぶって走ったので何度か水田の中に足を滑らせて、泥水で靴がビショ濡れになり、それがまた足をつかまれたような感触でおぞましい。

そうしてたどり着いたのが、山のふもとの小さな神社だった。

鳥居をくぐると先ほどの恐怖は嘘のように消えてしまった。洋一は何が起きたのかを思い出そうとしたが、さっぱりわからない。

——この神社のせいかしら。妙に落ち着く場所だ。そうか、あんな何もない場所にいたから怖かったんだ。何かに囲まれているっているのは落ち着くものだ。

洋一は、周りを全て木で囲まれているこの神社に、包み込まれているような心強さを覚えた。

——しかし、これからどうしようか。朝までここで過ごすことはできないし、かといって、またあの畦道に戻って家に帰るのは恐ろしい。

彼が、やはり一晩ここに泊まろうと決めた時だった。

「ひっひっ……、臆病者や……」

という声が神社の中を二重にも三重にも響いた。

洋一は参道の突き当りの祭殿を睨んだ。子供が五人くらいしか入れないほどの大きさの建物だ。声の主は明らかだった。

「何故、お前がここにいる」

自信を取り戻した彼は、先程の屈辱を清算するためにも大声で怒鳴りつけた。

「ひっひっ……、臆病者や……」

「なぜお前は兄に対してそんな馬鹿な真似をするんだ」

「お前の親諸共殺してやる」

「何だと」

洋一は激昂して、参道を一直線に祭殿へ突進した。そして、賽銭箱に飛び乗って祭殿の扉を開けた。中は見た目より広い。彼は笑い声に挑発されて、物怖じせずに中へ飛び込む。

光が入ってこないのが真っ暗だった。洋一は壁を頼りにして前に進もうと思ったが壁がない。空気を掴むばかりだ。

——おかしいな。外からだと思っただけだと思っただけだ。

彼は首を傾げながらも、笑い声を聞くと夢中でその方を追いかけた。

「どこだ、どこにいる！」

木が軋む音、そして扉が閉まった。——しまった！

洋一は慌てて入り口に駆け寄ったが、扉はぴったり閉じていてびくともしない。彼は息を荒くして、泣きながら扉を叩いた、その時だった。

「元気な子だこと」

彼の母親の短い笑い声が扉の外から聞こえた。

「お母さん。後どのくらいで生まれるの？」

少年の声。洋一は全身に鳥肌が立つのを感じた。あの奇妙な笑い声こそ立てないが、確かに——。

「あと二か月だ」

父親の声。

「僕可愛がるよ。弟だものね。いじめたりはしないさ」

「ふふふ」「ははは」「ひっひっ」。三人の笑い声。

洋一は泣きべそを搔きながら扉に体当たりした。

「あら、この子ったらまたお腹蹴ったわ」

母が再び短く笑う。

洋一は再び体当たりした。何度も何度もぶつかっていった。しかし、そのたびに笑い声は大きくなっていく。

――ひっひっ。ひっひっ。ひっひっ。ひっひっ。ひっ……。

「見えるんだよ！」

「え……な、何が？」

「球がはっきりと見えるんだ。これならいける気がする。うおおおおおおおおお〜〜！」

拓実は渾身のドライブをかける。卓球の球は見事に拓実のラケットに跳ね返され、相手のコートに入る。

「なっ！」

松田は予想外の反撃に球をかえせず、思わずよろける。そこにいた者たちも驚きの色を隠せないでいる。高校王者の松田から点を取った者など、過去にいない。拓実が初めて松田から点を奪ったプレイヤーということだ。

しばらくの間オーディエンスがざわめく。小さな歓声上がる。

「やるね〜。」

そうやって松田は音速サーブを繰り出す。回転が強すぎて、相手のコートに入った球は直角に曲がるという必殺サーブだ。このサーブも、目でとらえるのが難しいという速さなのだから、別にまがってくれなくて常人以上に返せる訳無いのだが、松田は手を緩めない（もはやそれがネットインなのかどうか分からないが、審判もよく見ていないのでどっちだって同じことだ）。だが拓実も球の曲がる方向に回り込み、逆方向の回転をかける。松田ほどの速さではなかったが、球は空中にいながらもしゅるると音をたてて松田のコートに入る。球はそのまま回転のおかげで急加速して、松田の目の前に迫る。

「なかなかやる！」

そう言いながらも松田は余裕そうに、ラケットの横で球を打ち返す。もちろんラケットを振るのも早すぎるからどこで球を打っているのかは拓実にしかわからない。だが拓実にも球がどこへ飛んでいくかはわからない。ラケットの横で打ったらふつうは見当違いの方向に飛んで行ってしまいが、松田はミスを犯さない。実際球はあり得ない軌跡で拓実のもとに向かってきた。一見見当違いの方向へ飛んだと思われた球は、大きなカーブを描いて拓実のほうへ向ってきたのだ。

「え、えええええええええ〜〜！」

拓実も驚きながらもラケットのバックで返す。だが拓実は、球を普通の速さ、一般的な回転でしか松田のコートに返せない。すると松田は異様な構えを取った。何か大きな技を出すのかもしれない。卓上とは距離を取ったまま、ななめ向きだった体をまっすぐ前向きに固定し、ラケットを持つ右手を奥に引き込み、何も持たない左手を平手で前に突き出した。そして球の来る寸前で平手を引き戻し球を自分のもとに吸い寄せるようにすると、左手を戻した反動でそのまま上半身を左回転で回転させ、引き込んでいた右手のラケットを左前に出し得意の回転で球を打ち込んだ。

「とおっ！」

松田はそうやってその技を撃ち放った。

「すごい！。松田がどんな風に打っているのかが初めて分かった。けど、それは無理だろ〜（汗）」

球はすさまじい低空回転で拓実のコートに入り、球についていた逆向きの回転で再び松田のほうへ吹っ飛んだ。球はそのまま松田の後ろの壁にぶつかって砕け、それとともに卓球場には大きな風が吹き荒れた。オーディエンスはもう何が何だかわからないけど、もう何が何だかわからないようにふるまって、もう何が何だか分からなくなっていた。泣き出すものもあるし、踊りだすものもあるし、天に向かって祈りだすものもあるし、もうその辺收拾がつかなくなっていた。拓実と松田ははまだ試合中なのに、先輩たちはわけのわからないことを言いながら彼らにぶつかってきた。

「やばい！ 先輩たち目が逝ってるよ！」

松田は怒鳴り散らしている。

「うるさい！ 黙れ！ 死ね！ 消えろ！ こいつ！ このやろ〜！」

松田がラケットを渾身の力で一振りした。するとその風圧で先輩たちや拓実も含めてそばのものがほとんど飛ばされて、下に落ちた。その際柵は壊れ、拓実は、先に落ちていた先輩方の上に落ちた。

「あ痛たたたた。」

拓実は自分の下でくたばっている先輩方に申し訳なく思いながらも、頑張って立ち上がろうとした。するとお茶のペットボトルが飛んできて拓実の額に直撃した。拓実はそのまま先輩十五人ほどの山の上から転げ落ちる。

「ふざけんな〜！」

「邪魔すんな〜！」

「早くどけ〜！」

「帰れ〜！」

そういう声とともにいろんなものが飛んでくる。生徒が何人もすごい形相で拓実に向かってくる。明らかに怒っている。やれやれ、ちょうど卓球場の下では教師と高三のバスケが行われていたようだ。古峰先生とか、大峪先生とか、河智先生とかが、やめろお前らとかやめなさいとか、やめんかお前らとか言って彼らを止めているのが聞こえる。それでも生徒たちの怒りは全然おさまらない。教師と生徒のバスケは毎年すごい盛り上がりだから、それを邪魔されるのが嫌なのはわかるけどそんな怒らなくたっていいじゃないか、と拓実は思う。けど生徒たちはいつもの国語教師への鬱憤を晴らそうと恐れることなしに突っ込んで来る。河智先生なんかぶちギレちゃって向かってくる生徒の襟元をつかんでぶん投げている。古峰先生は意外とデカイ体型を生かして縦横無尽に生徒たちを薙ぎ払っている。大峪先生は生徒よりも小さい体を活かしてあちこちを走り回って、暴れまわる生徒たちを次々に転ばしていく。そして転んだ生徒を古峰先生と河智先生とが二人でのしかかる。それを決められたら生きて帰れる生徒はいないだろう。ときどき細河先生が真似して、おりゃーって言ってタックルをしている。彼だけひどくうれしそうだ。

そんな先生たちの暴れっぷりを見て、学校中の高校生が集まってきて戦闘に加わる。大峪先生率いる教師バスケチームはさすがに多勢に無勢、劣勢へと追い込まれてきた。

「ちょっとさすがにこれはやばいですね。」と大峪先生が特有のちょっと笑った声で言う。

「ホンマすごいですね〜。」河智先生が独特の発音で言う。

「でも楽しくない？」細河先生がやっぱりちょっと楽しそうに言う。

「楽しんでる場合じゃないですよ」古峰先生があきれて言う。

先生たちはあまり危機感を感じていないようだが生徒は次から次へと体育館に入ってくる。

教師側の敗北が確実となってきたその時、体育館の入り口付近で悲鳴が起きる。入り口近くの生徒たちは一気に後方へと吹っ飛ぶ。教師側に Mory 先生率いる援軍が来たのだ。援軍は精鋭ぞろいだった。苦笑いしながら袖をたくし上げている名淵先生とか、両方の手を、グーにして自分の腹の前でくっつけたり離したりしていて、ちょっと不機嫌そうな保曾井先生とか、めったに怒らないけどさすがにこの事態に当惑を隠せない感じのミスター・デイビスとか。あと檜先生とか楯野先生とか、字訓先生とか穂山先生とかもやる気満々のようだ。あとやっぱり大壽賀先生も来ているのが、おもしろい。あの先生に何ができるというのか。

それに何より、Mory 先生が表情をほとんど変えないでずかずかと進んで来るので、これにはさすがの生徒たちもたまりかねた様子で、戦意を喪失し、一目散に散り始めた。だが先生方は容赦をしない。出入り口を完全にマークし、逃げ惑う生徒たちを次々となぎ倒していく。

.....
ここに教師たちと高校生たちの全面戦争は終結した。

『では、閉会式を始めます。』

『～～。えー、今年度は昨年度以上の盛り上がりを見せ、前代未聞のこともありましたが、教師たちと生徒たちのつながりがより強固なものとなり、競技会実行委員、風紀整備委員はもちろんのこと、生徒たちが一丸となって競技会を無事に終わらせることができたことを本当にうれしく思います。みんなよく頑張った！！ 終わります。』

やっぱり締めは校長先生じゃなきゃ！！

※ この小説（？）に登場する人物は現実の人物とは一切関係ありません。

西尾純玲

「見えるんだよ」

小さく叫んで玉木君の袖につかまったのは、本当にびっくりしたからだ。

その日、飼育係のわたしは、同じ飼育係の玉木君と一緒に、クラスで飼っていたうさぎのお墓を作っていた。飼育小屋から校門と反対の方を向くと、ちょうど体育倉庫の裏手に、湿っぽくて土の柔らかい場所があった。そこに穴を掘り、毛が抜けてみすぼらしくなったうさ美を横たえた。土をかぶせて盛り上がったその量が、うさ美の魂の量なんだ、とぼんやり考えている時に、玉木君がアイスの棒を立てながら言ったのだ。

「見えるんだよ」

「何が」

「うさ美が」

声が震えないように左手で胸を押さえつける。右手は玉木君の袖を離すことができない。

「うさ美が、苦しんでるのが見えるんだよ」

玉木君はまじめだ。月曜の朝七時半、変わり果てたうさぎの姿を飼育小屋の中に見つけた時の悲しそうな顔を、わたしは忘れることができない。その時、右手に握りしめたビニール袋が音をたてないように、息をひそめるよりもずっとたくさんの努力をした。そして、同じ努力は同じ玉木君の悲しそうな顔を前に繰り返された。袖を離せない。

「あ、すみちゃんを疑ってるわけじゃないよ」

弁解するように首を振る。クラスの子たちが、わたしが殺した、うさ美を殺した、って言ってたのを聞いていたのだ。

「それさ」

「何？」

「うさ美に聞いて、わたしじゃないってみんなに言って」

「ごめん。見えるだけで、声は聞こえないんだ」

なぜだか、玉木君の方が申し訳なさそうにしている。不機嫌なわたしなんか無視すればいいのに、玉木君はまじめだからちゃんと答えてしまう。声が聞こえないなら、わたしは手紙を書かないと。

その日から、机の中に毛をむしられたうさぎのぬいぐるみやわたしの名前が書かれたアイスの棒が現れ、鞆の中には土まで入れられていた。同じ飼育係で朝や放課後に一緒に活動することの多かった玉木君は、いつでもわたしの味方だったが、何しろ玉木君は人気者で、二人きりの時以外は、他の男子とサッカーの話で盛り上がっているか、女子に囲まれて昨日のテレビの話をしているかのどちらかだった。だから、初めて見たのがおじいちゃんのお墓参りの時だったことや、知らない人は見えないことや、若返っていてもその人だってすぐに分かることは、二人きりの時にしか話さない、二人だけの秘密だった。

だから、わたしもわたしの秘密を告げた方がいいのかな。

袖をつかんだ右手の感触を忘れない。いつも走って、いつも笑っている玉木君の、すこし湿った袖、それを思い出しながら、わたしは最後の手紙を書いた。

屋上はいつでも気持ちがいい。風が全部の罪を洗い流してくれるよう。でも、この手紙だけは飛ばされないようにしないと。きっと玉木君は見てくれる。わたしの姿を。手紙をこうして持っていれば、声が聞

こえなくてもきっと届く。遺書を残して、クラスの子たちに勘ぐられるようなことはない。玉木君だけにしか通じない秘密の通信方法で、わたしの秘密を残して行くの。

きっと許してくれるよね。だった、わたしをそこまで追い込んだのは、クラスの子たちなんだから。

玉木卓也

「見えるんだよ」

「えっ、やだ、こわいー」

「おいおい、卓也の言うこと、あんまり本気にするなよ」

「うるさいな。ほんとに見えるんだからしょうがないだろ」

無然とした表情も演出としては上々だ。嫉妬の滲む充の言葉も、女の子たちの緊張と弛緩をうまく誘導してくれる。

「ゆまはたくやくんに抱きつきたいだけでしょ」

綾に抱きつかれた充との打ち合わせは事前に済んでいる。お互いに、譲り合う気持ちが大切だ。といっても、俺たちの趣味がかち合ったことがないことを考えると、女の子受けのする俺に充が合わせているのかもしれない。

「でも、やっぱり廃校って怖いよね。いろんな噂があるもん」

「都市伝説、っていうらしいね、最近じゃ」

「俺に見えるのは、噂とか都市伝説とか、そんな怪しいもんじゃないからな。本当に、この小学校では女の子が自殺してるんだよ。もう、八年ぐらい前だけど」

「またまた、どこ情報だよ、それ」

「ここ、俺の母校なんだ」

充の表情が凍り付く。いつも俺のおかげでおいしい思いをしているんだから、たまには怖がってもらうぐらいかまわないだろう。それに事実、ここは俺の母校だった。

本気で尻込みする三人を引き離すように校門を飛び越えると、錆びた錠を回して、ぎりぎり通れるぐらいの隙間を開ける。由麻が真っ先に飛び込んできて、Eカップの胸を押しつけてくる。母校でやるっていうのも、なかなかの趣向だろう。

校庭を突っ切りながら、こんなに狭かったかなとつぶやくと、由麻が二十センチ下から、俺が成長しすぎたんだとかんたか言ってきた。感傷なんていう柄ではないが、昇降口に並ぶげた箱の小ささを見た時には少し胸が痛んだ。

「母校でおいたなんて、おまえも悪趣味だな」

「やだー。みつるくん、やらしー」

靴のまま廊下に上がることに抵抗があった。子供の頃の習慣というのは恐ろしい。高校だったら、こんな感覚は抱かなかっただろう。

「その子のこと、知ってるの？」

下からの声。由麻の上目遣いは計算のはずだが、この暗がりでは効果は期待できない。右手に持った懐中電灯を顔に当ててやろうかと思ったが、そのいらだちが後ろめたさの表れのように不愉快だった。

「同じクラスだった。一緒に飼育係をしてさ。ウサギの世話とか」

「かわいかった？」

「かわいくなかった。でも、俺になついてて、それなりに悪い気はしなかった」

「絶対、好きだったと思うよ」

「じゃあ、出てくるかもね。俺の腕にしがみついてて大丈夫かな？」

笑いながら返すと、その声が廊下の隅まで響きわたって、後ろで充が迷惑そうな叫び声をあげるのが聞こえた。だまってろ、今キスしてたくせに。

いじわる、といいながらさらに胸を押しつけてくる由麻を連れて、階段を上がる。後ろはついてきていなくてもいいだろう。お互いいい場所を見つけて楽しむだけだ。乱交の趣味はない。

階段を上がりながら、何階まであったか思いだそうとしたがうまくいかない。三階の表示を懐中電灯で照らし出し、まだ上に行くのと聞く由麻を無視して階段に足を掛けた。

「その子、屋上から飛び降りたんだよね。飼育小屋のウサギを殺したって噂が立って、いじめられて、それで」

「たくやくんはどうしてたの」

ハッとした声で言葉が切れた。そんなこと聞くべきじゃなかったのに、そんな感じだ。確かに。

「ごめん、そんなことどうでも」

「見て見ぬ振りをしてた。俺、昔から人気者で、いつも周りに人がいっぱいいたから、気にしなくても問題なかったんだ。飼育係の仕事をしているときは、なんでもなかったように話をした」

話したい気分だった。感傷だ。とても女の子とやるような気分じゃない。階段を上りきったところにあつた扉も錆び付いていたが、少し力を入れてやれば簡単に開いた。

風が吹き込んできた。由麻の髪が舞い上がって俺の顎髭をくすぐった。彼女は髪が長かっただろうか。思い出そうとしたが、記憶に引っかかるものが何もない。由麻の腕をふりほどくと、由麻が自分の意志で離れたみたいに腕を広げて、風が気持ちいいと言った。くだらないプライドだ。

「ここから飛んだのか」

彼女は、俺が幽霊が見えるという話に、ひどく興味を持っていた。それも、なぜか、霊の存在や何が見えるかといったことよりも、どういう風に見えるのかを具体的に聞きたがっていた。まるで、それが自分の人生を決定するんだと言わんばかりに。

「危ないよ」

後ろから声がする。大丈夫。

「ちょっとのぞいてみるだけ」

防護柵は申し訳程度の高さで、小学生でも易々と越えられるだろうと思われた。縁に手を掛けて下を覗くと、この高さでも死ぬのだろうかという疑問が沸き上がった。

「危ないよ」

大丈夫だって。

風が吹き上げて、刈り込んだ短髪がくすぐったい。

(すごく変わった。だれか分からなかったよ)

後ろで扉の閉まる音がした。振り返ろうとしたが、体が動かない。柵を掴んだ手が痺れている。

(ねえ。本当に見えてるのかな?)

少女。かわいくない少女。手に握った紙が血にまみれている。

わたしがやりました——太いフェルトペンで書かれた文字。

(私の秘密。私たちだけの秘密。やっと見てくれた)

雄弁すぎる眼差しだ。声が聞こえなくても、何を考えているか筒抜けの。かと思えば、少女は風と一緒に俺の髪を撫でて消えた。扉を内側から叩く音がする。ノブを回して引っ張ると、簡単に開いた向こうから由麻が飛び込んできた。

「階段の方からあやが呼ぶ声が聞こえたような気がして、そしたら扉が閉まっちゃって」

俺は由麻を抱きしめた。安心させるためでもなく、愛情の表現のためでもなく、ただ黙らせて、そして今空に上っていく少女を見送るために。

——知ってたよ。だって、見えるんだから。うさ美が、どうして苦しんでたのか。ビニール袋から何を食べたのか。

高校生は私小説しか書けないと考えているすべての人間に捧げる。

《全知の語り手と「私」の性交》

私は扉に背を向けて椅子に座っている。目の前の壁には丸い輪のようなものが掛けられていた。最初にそれが時計だと気付かなかったのは、針がすべて取り外されており、数字が丸い弧を描いて並べられているだけに見えたからだ。その横には若き日のシャーロット・ランプリングのポスターが貼られていた。『愛の嵐』のワンシーンだろう。女性が上半身裸でサスペンダーを付けナチの帽子を被っている姿はいつ見ても斬新奇抜だ。『愛の嵐』が制作されたのは確か 1974 年だったはず。1974 年、キング・クリムゾンが歴史的名盤『レッド』を発表してから突然の解散宣言を出した年。スペインの女優、ペネロペ・クルスが生まれた年。そして何よりソビエト最大の作曲家ドミートリイ・ショスタコーヴィチが死んだ年。

左目は潰れそこに膿が溜まりずいぶん痩せ細った灰色の猫が、しっぽをぴんと立たせ埃の積もった廊下の上を伸びきった爪を引き摺るかのようにゆっくりと歩いている。振り返り何も存在しないその暗闇へ向ってにゃーと小さな声で鳴いた。この廊下には左の壁に二つ、右の壁に一つ、合計三つの扉が取り付けられていた。一つ目の扉の中にはもう誰も弾くことのなくなったハモンドオルガンが物淋しそうに置かれてあり、譜面台の上にはエリック・サティ作曲の「ジムノペディ」の古びた楽譜が乗せられたままだ。二つ目の扉の中には、背もたれのない丸い椅子が二つあるだけだった。その椅子に座り若き芸術家達が本を片手に向かい合って討論をしている場面が蘇る。だが今、椅子の上には砂埃しか残っていない。カーテンも何も付けられていない窓の隙間からはひんやりとした冷たい風が時おり吹いてくるだけ。そして三つ目の扉の奥には薫が一人、扉に背を向け黙って椅子に座りながらただひたすらに取留めもない空想にふけていた。天井に取り付けられたボーズ製のスピーカーからはジャン・シベリウス作曲の交響曲第四番が流れている。「シベリウス？」薫は叫んだ。喉が渴いていたせいか、ぼんやりとした伸びの悪い声が部屋に響いた。シベリウス作曲、交響曲第四番イ短調、op.63。1911 年完成。

「1911 年。平塚雷鳥が文芸誌『青鞥』をはじめて発行した年！」薫が叫んだ。1911 年、つまり明治 44 年。部屋に流れていたシベリウスの交響曲第四番が終わった。次に流れてきたのはイギリスのプロGRESSIVE・ロックバンド、イエスの発表したアルバム『こわれもの』の一曲目「ラウンドアバウト」だ。

「イエス、1968 年結成」薫は言った。特に自信がなかったという訳ではないのだがその声はとても小さかった。1968 年、つまり昭和 43 年。

「1968 年。川端康成がノーベル文学賞を受賞。大庭みな子が『三匹の蟹』により芥川賞を受賞」薫がそう言った。

大庭みな子が芥川賞を受賞。その言葉に私は自分でそう言っておきながらつい嘔き出してしまった。ミスマッチと言おうか、古き良き時代と言おうか。その後も私は苦笑し続けた。

薫は大庭みな子が芥川賞を受賞したという自分が生まれる前の彼に言わせてみれば超現実的な出来事に思わず笑い出してしまった。そして薫は昔自分の母親が、大庭みな子と高橋たか子が対談した「対談・性としての女」という本を読んでいたのを思い出し、今ならそれを読んでも面白いかもしれないなと思った。

「ラウンドアバウト」の激しいキーボードソロを聴きながら私は高校時代に所属していた演劇部の顧問の先生が言っていた言葉を思い出した、「完成した脚本でも舞台の上で役者が喋るのはその半分だけ」そし

てそれは何よりも可能性の問題なのだ。脚本の可能性でもなく、役者の可能性でもなく、ようは世界の可能性の問題だ。私は強くそう感じた。

部屋の中を流れていた音楽が止まった。突然の出来事だったので薫は自分の思いが強すぎたあまり天井のスピーカーを壊してしまったのではないかと思ったぐらいだ。音楽はもう聴こえてこない。この部屋の音楽をコントロールしていた玲子が心臓麻痺で死んだからだ。

「音楽はどうした！」薫が叫んだ。この部屋の音楽をコントロールしていた薫の父親の愛人、玲子が突然死んでしまったせいでもう音楽は聴けない。

「音楽だ！ 音楽を聴かせてくれ！」私は叫んだ。いつからか私は音楽を聴いていなければ気が狂ってしまう人間になっていた。薫にはたとえそれが変拍子を多用した民族音楽やただ同じパワーコードしか使っていない単純なパンク・ロックであれ、ただ流れているだけでした。このまま音楽を聴いていなければ私は発狂する。薫は必死になって頭の中で音楽を流そうとした。くそ、脳内再生できない。聴こえない。音が聴こえない。薫は焦った。薫の、私の体は、薫の椅子に固定された体は、ロープで椅子に縛り付けられた私の体は、がたがたと震えだした私の体は、びくびくと震えだした薫の体は、薫は痙攣を起こしたが、もう何が何やら分からなくなってきた私は、吐き気がする、薫は、私は、激しい頭痛を、腹痛の激しさに、私、薫、薫、私、死にそうだ、私は、薫、薫、薫は、眩暈がする薫、私は吐き出した、私の、薫の吐き出した、その、真っ白な心臓のような、私は見た、そのげろは地面に落ちていった瞬間に、床中に撒き散った、私の心臓、薫、薫、なんて臭いだ、私は、その悪臭が目を焦がす、薫、私の気が狂った、薫、私、愛しているよ、薫、そのまま強く抱きしめて、気分が悪くなるほどに、強く抱いて、私を、げろを吐くほどに、薫、薫、薫、薫も、私に、私の、私は、私もろとも、薫、椅子が倒れた。薫が叫ぶ。

「音楽をくれ！」私は、薫は、私は叫ぶのだった、薫は叫んだ。孤独な人間が心に浮かんだ言葉を思い浮かんだ順に口から零していくように、薫、薫、薫、薫。音楽をくれ、薫。でなければ、私は、緑色の体になって、しまう、薫はなってしまうのだ。緑色の体になっても、ても、ても、ても、ズボンだけは破けない。私は、薫、の、体、は、私の体、むくむくと、大きくなり始め、私の体を縛り付けていた、薫の、ロープは、薫の、音を立てて次々と切れていった。薫よ、ちなみにショスタコーヴィチが死んだのは1975年だ。私、そんなの今は関係ないだろ、薫！

《全知の語り手と作者の性交》

その部屋にはジュリエット・ベルトのポスターが貼られている。ポスターの下の机には、ロラン・バルトの「エクリチュールの零度」、澁澤龍彦の「唐草物語」、サミュエル・ベケットの「マーフィー」と「ゴドーを待ちながら」、高橋和巳の「悲の器」、フランツ・カフカの「城」、ジョリス＝カルル・ユイスマンスの「さかしま」が乱雑に積まれていた。積み上げられた本の隣には詩を書き連ねた赤い表紙のノートが置かれてあり、そのノートの上には折り曲げられたボールペンが申し訳なさそうに乗っかっていた。机の下では倒れた電気ストーブが低いうなり声を上げている。向かいの壁のスライド書架の上にはスピーカーが乗っかっており、そこからショスタコーヴィチ作曲の交響曲第十四番「死者の歌」が流れている。電気の消された真っ暗な部屋の中、その音楽はどんな人間の精神でもいとも簡単に墮落させていくのだった。ぼんやりとした孤独がそれに鬱陶しく纏わりついてくる。やっとの思いで開けた窓もレースのカーテンを微かに揺らす生温かい風を迎え入れるだけで、逆にそこから陰鬱とした空気が黒い霧の広がる夜空へと流れていくことはなかった。誰かが階段を上ってくる音がした。気のせいだった。冷えたベッドシーツは持て余された肉体の存在をいたずらに誇張するのか、それともその世界の無へと引き摺り下ろすかのようにそれをただ飲み込んでいだけなのだろうか。家の前の通りでは黒い外套を着た大きな男がポケットの中でつ

いさっき道端で拾ったばかりの錆びた茶色い鍵をその太い指で弄りながら歩いている。男は家を出るとき恋人が投げた花瓶のその感触をまだ背中に感じていた。ブーツの底がコンクリートの地面と当たる男の足音が近付いてくるのに気付く、外灯の下で放尿をしていた野犬が男にむかって吼えた。

という小説を書いている私の机の上には今、アルベール・カミュの「異邦人」、ナタリー・サロートの「生と死の間」、ミシェル・ビュトールの「心変わり」、ジャン・コクトーの「恐るべき子供たち」、高橋たか子の「骨の城」、アラン・ロブ＝グリエの「消しゴム」、そしてアラン・ロブ＝グリエの特集の組まれた「早稲田文学」が積まれている。天井に吊るされた二つのスピーカーからはジャズピアニスト上原ひろみの「スパイラル」という曲が流れている。後ろのソファでは彼女が黒いショートパンツを履いたその綺麗な足を組みながら雑誌を片手にさっき私の入れたアールグレイの紅茶をマリメッコのティーカップで飲んでいた。ソファの前のガラス机の上にはジャズとクラシックのCDが散らばっている。部屋の隅のアール・デコ調のヨーロッパアンハンガーには彼女のおしゃれな帽子とマフラーが掛けられていた。

という描写をしている彼の机の上には、太宰治の「人間失格」、ヘルマン・ヘッセの「デミアン」、石田衣良の「池袋ウエストゲートパーク」が置かれてある。壁にはセックス・ピストルズのポスターが貼られてあり、後ろの床に置かれたスピーカーからはアメリカのスラッシュ・メタルバンド、メタリカのサード・アルバム『メタル・マスター』の一曲目「バッテリー」が流れている。ソファには女など座っておらず、その肘掛けには昔彼が昼寝をしたときに口から垂れたよだれの跡が今でもちゃんと残っていた。ソファの前の卓袱台の上には昨日食べたカップ麺の容器が置かれたままだ。隣の部屋のリビングでは母親が風呂に入っている隙を見計らって彼の弟が母親の財布からお金を盗み出していた。弟は急いで自分の部屋へと戻るとドアがちゃんと閉まっているのを確認してから、ベッドの下の段ボール箱の中から兄のつまり彼の机の引出の中からこっそりと取ってきた成人誌を取り出し、その成人誌を眺めながら次第に大きく膨らんできた股間をズボンの上から手で擦っていた。

この作品の語り手はそんなことを言っているが、私の弟はまだ部活から帰ってきておらず、家にはいないので無論、母の財布のお金を盗んでから自分の部屋で手淫などしている訳がない。

ベッドの上で彼の弟はいよいよ鼻息を荒くしながらズボンの中に手を突っ込み、自身の硬直した竿を震える手でひたすらにしごいていた。

止めろ。弟の手淫の実況中継をするな。そもそも、そもそも、私に弟などいない。

弟は左手で持っていた成人誌をベッドの上に投げ出し、勢いよく仰向けになってから声を上げて喘いでしまわないよう枕に顔を押し付け、その枕の端を口に銜えていた。

止めろ。この作品の語り手は間違ったことを言っている。そのすべてが嘘だ。次の瞬間、私の腕を何かの腕が掴んでいた。

今、自身と血の分け合った最愛の弟が己の性の絶頂に達しようとしているその話を聞き、彼は硬化してきた竿がズボンの中で突っ張ってきたのを必死で隠そうとしている。彼自身のここ数年における同性愛的傾向がここにきて露になってしまったのだ。彼は焦っている。自分の弟が手淫をしている姿を想像して興奮する人間はあまりにも気持ちが悪いということを自覚しているからだ。彼は全知の語り手を通して世界を見てきたが、その世界の中にはもちろんその作者も存在する。つまり作者に見られている語り手はその上から作者を見下ろすことも出来るのだ。まさしく神の目線で。

神だと！ ふざけるな。お前はしよせん私の想像した世界にしか存在できない、私の創造物だ！ 早くこの腕を離せ！ なぜ私が私の創造物にコントロールされなければならない。そしてなぜ今まで世界のすべてを見てきたお前がぐるりと後ろを振り返り私のことを見ているのだ！ 私のズボンの中に何かが侵入していき、私の竿を力強く掴んだ。私はその何かを必死でズボンの中から取り抜こうとしたが、両腕が語り手に縛られているせいで何も出来ない。私の竿を勢いよくしごいている、これもまさしく語り手の腕だ。

作者は今語り手を犯そうとしている。

犯しているのはお前だ！ いいから早く離せ。

彼は知っているのだろうか、そこに語り手の存在を拒めば、小説は終わってしまうということ。そう、小説は無くなるのだ。

私にはどうすることも出来ない。もしまだ何か出来るとすれば、この世界を終わらせることだ。この小説もろともお前を、殺す。

はたして作者にそれができ

《作者と「眼球譚」のヒロイン、シモーヌの性交》

再び私が世界にやって来ると、そこにはジョルジョ・バタイユの創造したシモーヌがいた。白襟の糊のきいた黒い学生服を着ており、膝上まであるストッキングをはいた両足を抱きかかえそこに座りながら、顔をこちらに向け私のことを見ていた。

「私を待っていたのかい？」

私の問いにシモーヌは何も答えなかった。どうやらここにいるのは私と彼女だけのようだ。私はゆっくりとシモーヌに近寄っていき、何の躊躇いもなくシモーヌの髪を撫でた。私に髪を撫でられながらシモーヌはじっと私のことを見上げており、そこで私は改めて彼女の美しさを知ったのだ。

「小説で読むより、ずっと綺麗だね」

「うふふ」

シモーヌは恥ずかしそうに笑ったが、その後上目遣いで私の顔を見ながら舌なめずりをした。彼女はズボンの中で突っ張っている私のそれに気付いているのだろうか。彼女は四つん這いで遠吠えをするような姿勢になり私の目を見ながら口を大きく開けた。私はシモーヌを焦らすかのようにゆっくりとベルトを外すと、まだ完全にはなっていない自分の竿を彼女の鼻面に差し出した。

「ほら、嗅がしてやるよ」

そう言って私は竿を振りシモーヌの頬をはたいた。

「これが欲しいんだろ？」

シモーヌは口を開け、乱れた息をもらしながら、ぐるぐると眼球を回し私の竿を追っていた。もう私もシモーヌもそれが我慢出来なくなった。

「わかった。いいから早くしゃぶれ」

私がそう言い、シモーヌの唇にそれを近付けるとシモーヌは両手でしっかりとそれを掴みながら何かを味わうように目を瞑り竿の先を舌で舐め始めた。

「あまい、あまいんだよ」

私はシモーヌの後頭部を手で掴み彼女の頭を前後させた。シモーヌは苦しそうな表情をしている。その瞬間、私は彼女にとっての神となった。彼女の意志は束縛され、その口はしよせん私の竿の出入りする道具でしかないのだ。

「お前、歯の先が尖がってて、そこに当たると気持ち良いんだよ」

次第に私は喘ぎ始めた。腰は痙攣し、口もがたがたと震えだした。私が快感をえればえるほど、シモーヌへの支配欲は強まっていき、その支配欲が力を増して彼女の頭を前後に動かすのだ。シモーヌの口は音を立て、その淫乱な唇からは微かに自分にも意志を与えてほしいというその要求が表れたが、それも覚醒へと向うことなくしっかりと私の竿を頬張るという行為でしかその存在の維持が出来ないでいた。シモーヌは私の尻に手を回し、そう、この尻と言う言葉こそ彼女にとってはもっとも淫らで素晴らしい言葉なの

だ。シモーヌは今、彼女の中で淫らさのその頂点に咲き狂う私の尻を両手で抱きかかえながら、自分の口の中で暴れまわるこの狂気の服従欲にその精神を陵辱され続けていた。私の世界。その私の世界で私の意志を殺した男。この男ならこの孤独な世界から私を救ってくれるかもしれない。彼はきっと私と同じ、同じ孤独な人間なのだわ。はじめて私のすべてを分かってくれた人。彼ならきっと私を救ってくれる。救ってくれるはず！ 絶頂を前にして私はふと感じた。あの語り手がシモーヌを通して私のことを見ているかもしれない。全知の語り手がシモーヌを通して私を語っている。だがそれも今は。そう、たとえ語り手がシモーヌを通して私のことを見ているとしても今はその神の視線ですら快感なのだ。シモーヌをこの腕で犯している私はそのシモーヌを通して語り手から犯されている。快樂は私の中ではなく、私の世界だった。芸術の、想像における支配と服従が痛みと快樂であり、それが創造と表現のためのその存在なのだ。世界の先にあるのは他にもない存在ではないか。だとすれば私はこの死んだ紙の上で私を語りきった。

私には私を語ることももうない。

《「私」とジョルジョ・バタイユの性交》

壁にはアンナ・カリーナの泣いている横顔のポスターが貼られている。そのポスターの下の机には、ロラン・バルトの「エクリチュールの零度」、澁澤龍彦の「高丘親王航海記」、高橋たか子の「骨の城」、アラン・ロブ＝グリエの「消しゴム」、モーリス・ブランショの「最後の人／期待忘却」、水村美苗の「日本語が亡びるとき」、レーモン・クノーの「地下鉄のザジ」、阿部和重の「ミステリアスセッティング」が乱雑に積まれていた。机の下では電気ストーブが低いうなり声を上げている。向かいの壁のスライド書架の上にはスピーカーが乗っかっており、そこからショスタコーヴィチ作曲のヴァイオリン協奏曲第一番が流れている。私はそれを聞きながら机に座り、今朝デジタルカメラで撮ったばかりのショートフィルムの編集をしていた。ふと私はイギリスのプログレッシブ・ロックバンド、ピンク・フロイドの発表したアルバム『おせっかい』の最後の「エコーズ」という曲を聴きたくなりCDを替えようと後ろを振り向いた。するとスライド書架の前のソファにはジョルジョ・バタイユが座っていた。ジョルジョ・バタイユはぼんやりとした様子で天井を眺めていた。

「なぜ、ジョルジョ・バタイユがここに？」

バタイユは私の質問にも答えず、あいかわらずぼんやりとしている様子だった。しかたがなかったので私はスライド書架の所まで歩いていき、スピーカーからショスタコーヴィチのCDを取り出すと替わりにピンク・フロイドのCDを入れた。風の吹く音が聴こえる。『おせっかい』の一曲目に入っている「吹けよ風、呼べよ嵐」という曲はプロレスラー、アブドーラ・ザ・ブッチャーの入場曲にも使われた比較的有名な曲である。昔はプログレッシブ・ロックもポップ・ミュージックとして聴かれていた時代があったんだけどな。私はそう呟いた。昔は「眼球譚」も若者達のバイブルとして読まれていた時代があったんだ。そうも思った。

「シモーヌを知っているか」

突然、後ろのソファに座っていたバタイユがそう言ったので私は驚き、急いで振り返りバタイユを見た。バタイユの乱れた白い髪が見える。

「シモーヌはどこにいるのだろうか」

私は首を振った。といっても私に背を向けて座っているバタイユに私の姿が見えるはずがない。私はソファの前まで行きバタイユの顔の見える位置に立つか、それともこのままバタイユの後ろに立っているべきか迷った。だが私にはバタイユの目を見ながら彼の話の聞くことなどとてもではないが出来そうになかった。しばらくは様子を見ることも兼ねてそのままここに立っていることにした。

「シモーヌ」

バタイユは小さな声で「眼球譚」のヒロイン、シモーヌの名前をさも愛しそうに呼んだ。

「作者だよ」

その瞬間、私はバタイユの後姿からただならぬ何かを感じた。

「この作品の作者がシモーヌを犯した」

気付けばバタイユは私の前に立っていた。それから私の胸座を掴んでこう続けた。

「この小説の作者が自分の欲望のままに私のシモーヌを犯した！ 私のシモーヌを、彼の世界で」

私は恐怖で唇を震わせながら、そのバタイユの力強い腕を掴むことも振り切ることも出来ず、ただそこに立ち尽くしていた。状況を把握することが出来ない者にその状況に陥った訳を話されても、それを理解するのは不可能なことだ。

「シモーヌは陵辱されたのだよ！ 私の、私のものが」

「ちょっと待ってください！ そんなことを僕に言われても」

バタイユが私を睨んだ。私の目の前にあるのはただの目ではない、これを眼球と呼ぶのか、私はそう思った。

「シモーヌを犯したのは作者で、僕じゃありません。だからそんなこと僕に言われても僕は何の責任もとれません。僕は作者が作りだしたただの創造物です。シモーヌの責任をあなたがとれないように僕にも作者の責任はとれない」

「責任がとれないのなら、罪を償え！」

そう言うと、バタイユは私の頭を勢いよく下に押し付け私に跪かせた。自身のベルトを外すと、そのベルトで私の顔を叩きつけ、ズボンの中から取り出したそれを私の鼻先に差し出した。私が躊躇しているとバタイユは私の後頭部をがっしりと掴み、無理やり私にそれを口に含ませた。私の頭を力強く手で動かして前後させている。私は呼吸が困難になり今までに経験したことのない苦しみを感じた。ああ、誰か私を救ってください。作者の想像した世界の「私」に何の罪を償えというのですか。私には何も出来ない。もし神がどこかで私のことを見ているのなら、どうか神様、こんな私を救ってください。

《全知の語り手と読者の性交》

世界は失われた。壁に貼られたポスターも、机の上に積まれた本も、聴こえてくる音楽もすべて。読者の意識にしか存在しない世界は、そして読者が語り手を通して見てきた世界は、何もかもが無くなった。世界の先に立っている読者よ。語り手は読者にしか語りかけない存在なのだから、——この声を聞いている唯一の存在よ。お前と一緒にになった瞬間、そこからは何が見えるだろう。存在の先にあるもの。その意識の崩壊。語り手が読者を通して見る世界。お前はもう気付いているのだろうか。その後ろに横たわる、作者の死体に。

全知の語り手と読者の性交は終わった。アンチ・ロマン、狂気、マダム・エドワルド、サルトル、シュルレアリスム、エクリチュール、眼球、澁澤龍彦、生田耕作、エロス、ゴダール、気狂いピエロ、ピンク・フロイド、21世紀の精神異常者、ドゥ・マゴ、ルノワール、イレイザーヘッド、インランド・エンパイア、ロブ＝グリエ、ショスタコーヴィチ、不条理、実存、消費、非生産、非ロマン、さかしま、エッフェル塔、ミヒャエル・ハネケ、オーシュ卿、都心ノ病院ニテ幻覚ヲ見タルコト、田舎医者、シェイクスピア、ステイーヴ・ライヒ、ゴドーを待ちながら、マックス・エルンスト、ルキノ・ヴィスコンティ、マーラー、盲目、太陽肛門、コーエン兄弟、シベリウス、ジャック・デリダ、トリスタン・ツァラ、ニーチェ、ブリキの太鼓、ヤン・シュヴァンクマイエル、高橋たか子、ダリ、マーティン・スコセッシ、自閉症の狂人、ロジャー・コー

マン、モーリス・ブランショ、フェリックス・ガタリ、ドストエフスキー、ミシェル・フーコー、アンリ・ベルクソン、夢野久作、アンドレイ・タルコフスキー、シド・バレット、ルイス・ブニュエル、時計じかけのオレンジ、ロッキーニ、路面電車、エリック・サティ、マルグリット・デュラス、イマヌエル・カント、悲愴、現代、モナリザ、テオドール・フランケル、ミシェル・ビュトール、右側に気をつけろ、欲望のあいまいな対象、幻惑されて、勝手にしやがれ、あなたがここにいてほしい、小説墮落。

つめたい死体

朝、窓を開けると、蟬の死骸が転がっていた。夏の鋭い陽射しは朝から厳しく照りつけ、命に置き去りにされた蟬の軽さを容赦なくあぶりたてる。白い光にまぶたが重い。苛立ち混じりに指を弾くが、蟬の意外な熱さに力を削がれた。内側から湧き出しているとしか思えないその熱は、蟬が一個の存在であることを訴えていた。

三年前、父の死は冷たく訪れた。白はどこまでも白く、シーツも壁も蛍光灯の明かりも、そして、家族の訪れを待っていたであろう父を覆う肌もまた、歴史を削ぎ落とされたかのように白い。しかし誰一人、父の死には間に合わなかった。最後に到着したのは、数年前から地方勤務になっていた私だ。夜明けすぐのロビーにいた弟の瞳には涙の痕もなく、頬は乾いてひび割れていた。結論を突きつける鋭い唇は躊躇いもなく、黒い翼の不吉さで語りだす。

「遅かったね。……間に合わなかったよ、誰も」

「早かったな。六十二歳、か」

「ああ。実感がないよ。……いや、これを実感っていうのかな」

病室には母と妹が立ちつくしていた。目元と唇の形がよく似た二つの顔は、玄関に張った蜘蛛の巣でも見るような表情で、そこに横たわる父を見つめていた。病室の空気が二つの視線の一方通行に絡め取られ、父の死の意味が行き場を失ってぶら下がっている。白いベッドにくるまった父の肉体には、どこにも父の痕跡が見あたらなかった。だから母も妹も、そして私も、泣きもしなければ話しかけもしない。すがりついたりなじったりなどできようはずがない。現実感がなかったと言えれば聞こえはいいが、その実、目の前に転がる死体と父という存在の意味が引き裂かれ、見慣れない部屋にぶちまけられていたという、ただそれだけの話だ。

父が、特別に遠い存在だったという記憶はない。子どもの頃、休日にはへとへとになるまでキャッチボールをしたし、夏休みには家族で山へ海へと旅行をした。残された写真に父の姿はまれだったが、その情景にはファインダー越しの父のまなざしが温かく写っていた。

――そう、家族はとても温かかったのだ。

ぬるま湯は火傷もしないし、いつまでもいつづけるには心地のいい温度なのかもしれない。しかし、それは気づかないうちに冷めていて、一度出てしまえば二度と中に入る気にはなれない。

一緒に暮らしているという事実が失われれば、家族である根拠はなくなるし、散り散りになってしまえば元に戻ることはない。高校を卒業した私は、仕事の都合ですぐに家を出た。続いて弟が、そして妹は誰とも知れない男のところへ嫁いでいった。父と母だけが置き去りにされた家は想像の及ばない世界だ。かつて、私たちの産まれる前はそうであったはずの二人だけの世界――冷めてしまった湯船の中で、かつての恋人同士はどのような暮らしを営むことができるだろう。父の死体を眺める母の黒くひび割れた瞳と、白く乱れた髪がこの十年の長さを物語っていた。

窓からの侵入を試みる朝の陽射しは、病院の周囲に立ち込める重苦しさに明るさも暖かさも削がれ、夜を抜けた病室に命を吹き込む力を失っている。父の死体に引きずられるように、病院中に死が蔓延しているようだ。磨き抜かれた白さの先には、あらゆる細菌の侵入を拒む清潔さがあるはずだが、そこに感じられるのは生命そのものが駆逐された冷ややかさだった。

死体を眺める二人の呼吸が薄らいでいくのを見ていられなくなった私は病室を出た。ロビーで弟に顔を

合わせる憂鬱を思った私は、一晩中運転してきた以上の重みに沈む足を引きずって階段を上った。すれ違う人間の一つひとつに暗い影が差している。治す側も治される側も、みな一様に死を背負っているのだ。私の背中にも釘で打ちつけられているはずのそれを左手でつかもうとするが届かず、行き場のない右手が屋上の重い扉に手をかけた。

そこは海だった。無数のシーツが夏の陽射しを受けて白く輝き、熱い風を孕んで波打っている。眩しさに目を細めた私に舞い降りたのは故郷の夏を覆い尽くす蝉の声であり、伸ばした手の先に触れた感触は、燃えるような陽にさらされた蒲団の熱気と、父親の太くてたくましい腕を枕にして眠った汗だくの夕方だった。それは少し熱すぎる距離感――。

陽射しに叩かれた蝉は、乾いた音を立てて揺れている。少し涼しい朝の風は、寝起きの汗ばんだ肌を静かに冷ましていく。蝉から湧き出す熱を忘れない私は、自分の内に溜め込まれた熱の生々しさにおののいている。

(了)

あたたかい死体

死体は冷たいという話を聞いていたが、母の死体は一向に冷たくなならない。四週間前に死んでから、今でもリビングでテレビを見ている。

後ろから見ると、長く伸びた髪の間から見える首だけは少しずつ腐敗が進んでいるようだったが、体を触ると驚くほど熱い。その熱さにとがめられたような気分になる私は、それ以上、母に何をすることもできない。

そんなことだから、私は母が死んで一週間が経つまで、その変化に気づかなかった。死が急激に襲い掛かるものだというのは、どうも間違いだったらしい。死は緩やかに訪れ、母を徐々に侵食していく。だから、もしかすると四週間前に母が死んだというのは正しくないことなのかもしれない。だが今の私には、その日に母が死んだとしか思えない。

仕事から帰ってきた私の目の前を蟻の行列が横切っていく。天の川のように輝いている彼らは、よく見ると白く光る何かに濡れていた。子どもの頃を思い出して後をたどっていくと、リビングにたどりついた。

蟻はリビングでテレビを見る母に続いていた。正確に言うと、蟻はリビングで甘い汁を滴らせる母を目指して行列を作っているらしかった。全身を甘い滴で濡らした蟻は、満足そうに帰りの列に加わる。それは母の胸から垂れているらしく、畳に染みた滴を指先ですくい上げようとすると、粘り気と共にほんのりとした温かみを感じた。それはとても甘く、ああこれで私は育ったのだなと考えたりした。

その後も母は死に続けた。一週間後に私がその死に気づいたのは、蟻の行列に変化があったからだ。相変わらず母に向かう蟻は星の数ほどいたが、一匹たりとも帰ってくる様子がない。リビングに行くと、母の根元から煙が上がっていた。そこでは蟻がしゅうしゅうと音を立てて焼けており、畳にもアイロンのあのような焦げ跡が付いていた。一週間前には温かかったはずのその滴は、私の指先を熱く焼いた。

翌日、最後の蟻が母に登頂すると、母の口元から滑り落ちたよだれが、テーブルの上のニスを溶かしていった。やがて、剥き出しになった天板は鳶のような触手を四方に伸ばし、それにつれてテーブルは小さくなっていった。母の前に置かれた湯飲みは行き場を失い、母の膝には熱いお茶がかかったはずだったが、お茶はしゅうしゅうと音を立ててリビングを霧で覆った。

畳に火がつかないのが不思議だったが、母の服は二週間目に少しずつ燃えていった。中から現れた体は、私の記憶にある母の姿とあまりに違って戸惑った。子どもの頃、お風呂の中で見た母の裸は、父の部屋の画集で見た「オランピア」という絵に似ていて、幼い憧れを抱かせるものだった。それが今や、水門を閉じられた干潟のように何も生み出す気配がない。いや、乾いてひび割れた皮膚からは、時折ごぼごぼと

音を立てて、黄色い液体が流れ出す。そのおぞましさは「オランピア」が娼婦を描いたものだと知った思春期の恐怖に喩えることができるだろう。

三週間目には、久しぶりに私の妻がやってきた。ネズミの死体とゾウの汚物を煮詰めたような臭いに顔をしかめた妻は、玄関口で私を好きなだけ詰って去っていった。臭いに対する感覚がなくなったわけではなかったが、私にとってその臭いは必ずしも不快なだけのものではなかった。幼い頃にいたずらで圧力鍋にネズミを入れた時、母は優しく私を叱りつけ、近所の肥溜に逃げ出した私を助け出して抱きしめたからだ。あらゆる臭いは母に結び付けられている。

そして今、目の前で、腐敗しているように見えそうなじから、一輪の花が咲こうとしている。エメラルドのように透明の茎の中を、教科書で見たことのある赤血球が、近未来の自動車のように滑っていく。目を覚ました猫の動きでしなやかに体を起こし、白く色を失った髪の間から赤い血のように噴き出す丸い花——それは、私が初めてプレゼントしたカーネーションだった。

(了)

編集後記

感慨無量。その一言に尽きる。

パソコンの文芸部フォルダの中には、かつて発行していた文芸部機関紙「Lapis Philosophorum」（六号で廃刊）や「文芸部週報」（週報にもかかわらず二号で廃刊）、加えて、平成十六年度の学園祭で発行した機関誌「響」のデータが残っている。どれもこれも、一瞬の昂ぶりの中で生み落とされながら、その後命を永らえることのできなかつた不遇の息子達の墓標だ。

そして「楽藝」である。誰が、30号という長期刊行を予想しただろう。誰言おう、この私ですら考えもしなかった。「楽藝」が部の機関紙である以上、その存続は部員の活動状況に依存する。この30号という道のりには、代々の部員が受け継いできた意志の轍が深く刻まれている。

今、ここに生まれた機関誌「虐睨」――そこに、迷った末に「1号」と銘打つことにした。それは、「虐睨」の先に道を拓くための旗である。在籍中の部員を軸としながらも、OBまで広く巻き込みながら一大コミュニティを築く可能性を見た今、「虐睨」が刻む轍が、世界に新しい意味を描き出す力になる予感に戦慄せずにはいられない。

と書いたのは、2009年に刊行した「虐睨第一号」の時。それから四年、ウェブ版を立ち上げるにあたって、幻の（諸々の事情により刊行不能になった）第二号の原稿と合わせて、新たに第一号を刊行することにした。

ちなみに、当時30号まで刊行されていた機関紙「楽藝」は間もなく50号。刊行ペースは決して早くはないが、確実に前に進んでいる。

また、原稿は全て、2013年現在、引退ないし卒業した部員によるもの。文芸部の新たなステップへの礎となってくれたことを、ここに感謝します。

文芸部顧問 鵜川龍史

虐睨第一号（2009年／2011年）

<http://p.booklog.jp/book/75659>

2013年8月31日発行

著者：世田谷学園文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ryujiu/profile>

編集者：鵜川龍史

発行者：鵜川 龍史

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75659>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75659>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ